

はつはな／その年の春、初めて咲く桜のこと。一輪二輪、枝に咲いている姿は初々しく可憐である。心待ちにしていた開花を喜ぶ気持ちが「初」という文字に現れている。

らしっく

自分らしく、
粋なくらし

CLOSE UP

広島に伝わる 文化遺産を伝承



小河原火舞保存会

100年以上の歴史を持つ「火舞」
限られた地域に伝わる貴重な文化遺産



特定非営利活動法人雁木組
水の都広島に残る歴史遺産「雁木」を
保全、活用



まぼろしの江波焼探偵団
ロマン溢れるまぼろしの江波焼に迫る



らしっくコラム

今も、普通に歩けるけん。
～歩いてみよう、西国街道



100年以上の歴史を持つ「火舞」 限られた地域に伝わる貴重な文化遺産

吹き火の様子

CLOSE UP 広島に伝わる文化遺産を伝承

広島には歴史あるさまざまな文化や痕跡が残っています。また近年になり、まぼろしとされていた遺物が発見されるなど、広島文化遺産の伝承に努めている団体を紹介します。

小河原火舞保存会

<http://www.ogawara-himai.com/>

「十二神祇神楽」と「吹き火」を守り伝える

明治初期、現在の広島市安佐南区西原地区の神楽団「西原上十二神祇神楽保存会」に師事し、広島市安佐北区小河原地区で創設した神楽団が「小河原火舞保存会」です。名称にある「火舞」は、中国地方でも広島市の数か所にしか伝承されていない高さ10m以上にも吹き上がる手製の「吹き火」と呼ばれる大花火と、「十二神祇神楽」を地元の小河原松尾神社の秋祭りに奉



▲ 花火取り付けの様子

納することに由来しています。広島県の旧安芸国南部（広島県西南部）の広島市、廿日市市、大竹市の全域に伝えられているのが「十二神祇神楽（安芸十二神祇神楽）」。毎年秋祭りの前夜祭に、十

二の演目を舞うことから十二神祇と呼ばれ、神事とともに演劇としての性格も持つ古い神楽です。昭和の時代に、戦争やテレビの普及で一時中断した時期もあったものの、今なお100年以上の歴史を持つ地域の伝統芸能として伝承されています。

「もともと吹き火は太田川流域の地区や佐伯区などで十二神祇神楽を舞う神楽団の間で行われていたという記録が残っています。現在、県内では私たちを含め10前後の神楽団が行っていますが、全国的にも行う団体は少なく貴重な文化遺産となっています」と語るのは会長の萬ヶ原伸二さん。会員は、神楽を舞う30人ほどのグループと吹き火を作る10人、合わせて40人が活動しています。

迫力ある「吹き火」は 見る人を魅了する圧倒的な光景

毎年、秋から春にかけて安佐北区内を中心に神楽を舞っていますが、1年の集大成となるのは10月20日に近い土日地元の小河原松尾神社で行われる秋祭りです。その日は、地元の住民はも



▲ 十二神祇神楽「関舞い」

ちろん、珍しい吹き火の迫力を生で見るために、県内はもとより、県外からも神楽愛好家が訪れているとか。「神楽は、各地域の競演大会に出演した際には舞いますが、吹き火は例祭の日だけ行います。吹き火の担当者10人が、およそ半年かけて作ります」。例年、春先に火薬を扱うための講習会の受講から始まり、9月に入ると地区内の竹林からよく吟味した孟宗竹を慎重に切り出し加工。長さ約1m、直径約20cmほどの孟宗竹の節をくりぬき、その中へ火薬と鉄粉を混ぜ合わせたものを詰め込みます。花火を製造する業者の工場を借り、会員が自分たちで一本一本手作りで花火を作っていきます。その間、これら作業と並行して消防署と警察署へ申請し許可を受けた後、やっと本番当日を迎えることができるそうです。

火薬を詰めた孟宗竹の口火に着火すると火が吹きだす仕掛けになっていて、火柱の高さは10m以上にもなります。「吹き火は、時間にしておよそ2〜3分。その一瞬のために、半年近い時間をかけて準備しています。10年、20年吹き火を作っているベテランでも、毎年その出来栄は違う。噴射口の切り込みの長さや穴の大きさは数ミリ単位で、火薬や鉄粉の配合量が異なれば、毎年、色や音、吹き上がる高さも違います。作る人は、どれだけインパクトある吹き火を見せることができるか、まさに1年に一度の真剣勝負。最後に吹き上がった瞬間は、何とも言えない達成感がありますね」。

また同会が保存している大正時代の文献の写しには、各家の吹き火の火薬等の秘伝の配合量が記されており、娯楽の少なかった当時、地区内の各家が、吹き火の出来栄を競い合っていたのでは、と萬ヶ原さんは推測しています。「地域に残された貴重な文化遺産。これからどう次の世代にバトンを渡すかが大きな課題です。この魅力を、もっと多くの人に知ってもらい、絶やさないようにしていきたいですね」と萬ヶ原さんは話をしてくれました。100年以上受け継がれてきた、貴重な地域の歴史ある文化を残し伝えようとする皆さんの熱い想いを感じました。



▲ 会長の萬ヶ原伸二さん

らしっく contents

Vol.53
初花号
2019.3

特集

01 広島に伝わる文化遺産を伝承

▶ 小河原火舞保存会



十二神祇神楽
「大鬼小鬼」

▶ 特定非営利活動法人雁木組



雁木を使った
イベントの様子

▶ まぼろしの江波焼探偵団



活動の様子

05 らしっくレポート ひろ記者が行く

▶ まちの文化や歴史を学び、伝え広げる広島の魅力

らしっくコラム

▶ 今も、普通に歩けるけん。
～歩いてみよう、西国街道
広島城 主任学芸員
前野 やよい



広島城

06 ようこそ！公民館へ

▶ 西区内公民館

07 人材バンク 名人 宝人 達人

▶ はまの省蔵さん
▶ 三吉 滴翠（重三）さん

09 Hm助成支援団体のご紹介

▶ 広島市防災士ネットワーク
▶ 特定非営利活動法人チャリティーサンタ広島支部
▶ 夢コレクション広島実行委員会

11 情報の森

15 プラザ通信

水の都広島に残る歴史遺産「雁木」を保全、活用

特定非営利活動法人雁木組

<http://www.gangi.jp/>

雁木タクシーを運航し新たな魅力を発信

広島^{かんぎ}のまちの中心部を流れる6本の川に約400ヶ所ある雁木は、干満の大きい広島での河川舟運で、船着場の荷揚げのために設けられた階段です。昭和初期まで、島しょ部や山地から木材や食料などの生活物資が船で運ばれ雁木で荷揚げされており、毛利輝元による広島城築城(1589年)以来、干拓や築堤によってまちが形成され、水運が発達した広島を支えてきました。「NPO法人雁木組」はその雁木を、水の都広島の地域財産として注目し、文化財の専門家や広島大学の協力を得て、歴史的価値を調査、検証。単なる保全活動だけに留まらず、雁木を有効利用し新しい広島の魅力づくりや、もっと川に親しんでもらおうと活動しています。

「平成16年7月に雁木タクシー(水上タクシー)の試験運航をはじめ、10月にはNPO法人を設立し、正式に雁木タクシーの運航を開始しました。広島デルタに50ヶ所以上ある発着可能な雁木^{やまぎまなぶ}を使って運航しています」と副理事長の山崎学さん。歴史的財産を活用した雁木タクシーは、当初から注目を集めました。

「約15年に渡って運航し続けている雁木タクシーは、今でも私たちの活動の中心です。現在は、小型船舶2艇で、平日は予約運航、週末・祝日は平和記念公園で待機し運航しています。年間、約4,000人の利用があり、その多くは観光客です」。

ほかにもボランティアと共に定期的に雁木の清掃、地域の小学校で「雁木学習」と題して水辺の文化を伝える活動、郷土資料館との共催による雁木に関する展示会やガイドツアーなどを実施しています。

また、広島市内水面漁業協同組合と連携し、シジミの稚貝放流など水辺で取り組める環境啓発活動も実施。毎



▲ 雁木タクシー運航の様子

年11月には、広島市中区京橋界隈の地域の皆さんと協力して、雁木にキャンドルを並べてライトアップし、ジャズライブを行うイベントを開催するなど、さまざまな人に雁木に親しんでもらい、その歴史的価値を知ってもらうための活動に積極的に取り組んでいます。

広島では日常の光景も全国的には貴重な風景

今も残る雁木の多くは、明治以降に造られたもので、一部は江戸時代のものではないかとされていますが明確なことは分かっていません。また干潮時に、まちの中心に干潟が出現する様子も広島ならではの貴重な風景です。こういった地域に残された歴史遺産を活用した幅広い活動に対して、各方面も注目。日本土木学会をはじめとした諸団体からも表彰されて、雁木組の存在は広島のみならず全国へも広まっています。

「広島市民にとっては、見慣れた光景のひとつでもある雁木。しかし、全国的に見るとその歴史的価値は非常に高いんです。これからも、もっと雁木の価値や活用していくことを広めて、保全しながら有効利用していくための活動を続けていきたいですね」最後に山崎さんはこう語ってくれました。広島に住んでいると、なかなか感じることのできない雁木の魅力や価値を見出し、活動続ける皆さんにこれからも期待します。



▲ ボランティアと雁木の清掃をする様子



▲ 副理事長の山崎学さん



▲ 協賛イベントでの運航の様子

ロマン溢れるまぼろしの江波焼に迫る

まぼろしの江波焼探偵団

江波地区に残る貴重な文化遺産 まぼろしから現実へ

江戸時代後期、現在の広島市中区江波地区で焼かれていたとされる江波焼。古文書に残るわずかな記録を手掛かりにその謎を解明し、江波地区の活性化に役立てたいと活動しているのが「まぼろしの江波焼探偵団」です。

「事蹟緒鑑(1812年)」、「村上家乗(1828年)」、「今中大学日記(1829年)」などの資料によると、当時、広島藩は財政難に直面し、他藩から入ってくる商品を制限し、領内で生産できるものはできるだけ領内で生産・消費するという国産奨励策に力を入れていました。1817年には国産品の生産を後押しする諸品方(物産方)が置かれたこともあり、焼き物生産に力を入れていたと思われます。江波窯は、1828年には、藩の出資により築窯、整備が進められ、翌年、藩主をはじめ藩の重臣たちが現地へ赴き視察するなど、江波での製陶業には並々ならぬ関心が注がれていたと推測できます。

平成18年に、江波地区を通過する広島高速3号線(広島南道路)の測量が始まり、平成20年に舟入公民館の中に研究グループが発足。平成21年に江波焼に興味を持った江波地区の住民約20人で設立しました。平成22年に道路の建設工事が始まった後、関係各所に許可を取り、対象となるエリアの家屋の取り壊しが始まった工事現場で、約3,000点にも及ぶ大量の陶磁器片を拾い出しました。「江波焼は幕末に製陶が途絶えて、江波皿山の南面付近にあったとされる窯跡も、昭和初期の宅地造成で失われ



▲ 江波焼記念碑、メンバーの皆さん



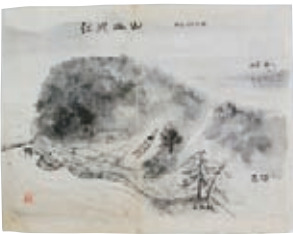
▲ 江波焼と思われる器。右手前に下り松、江波山、左奥に宮島が描かれている

た可能性が高いと考えられています。調べてみると、佐賀県嬉野市で発見された志田焼と図柄が似ているとされていますが、実際に江波焼で何を焼いていたのかは、分からないことが多いんです」と会長の中川巧さん。

工事現場から出土した、江波皿山東南麓付近一帯に濃密に分布していたとされる江波焼の遺物である陶片・窯壁・窯道具などを、これはほぼ間違いなく江波焼だろうという物、確証はないが江波焼ではないかという物、不明な物、江波焼ではない物、この4つに分類し、調査と研究を行っています。



▲ 会長の中川巧さん



▲ 明治時代の江波皿山の窯跡絵図(記憶図)

後世へ伝承するためのさまざまな取り組み

平成29年11月には大竹市の野分窯に協力を仰ぎ、江波焼のわずかな記録を頼りに杯や皿を再現するプロジェクトも始めます。さらに平成30年、江波焼の記念誌を作り、6月には広島高速3号線の高架下に、地区のシンボリック的存在として江波焼記念碑を設置。少しでも、その軌跡を残して行こうと取り組んでいます。活動を始めて約10年、地区に住む若い世代にこの江波焼について、どう伝えて残していくかが大きな課題だそうです。

「江波焼の正確な記録は残っていないので、学術的に100%の裏付けはありません。しかし、古文書に残るわずかな記録を手掛かりに、郷土資料として伝えていきたいです。今後は、科学分析も重ねて、少しでも研究の精度を高めていきたいと思っています。まぼろしの方がロマンがあって楽しいかもしれませんけどね」最後に中川さんはこう語ってくれました。まぼろしとされてきた江波焼で地域の活性化にも取り組む皆さんの好奇心に、大きなロマンを感じました。



▲ 出土した江波焼と思われる遺物